

アルケイア―記録・情報・歴史―
第一九号 二〇二四年十一月 一―五六頁
南山アーカイブズ

南山学園ライネルス館を中心に南山学園の建築について

二人の建築家マックス・ヒンデルとアントニン・レーモンドをとおして

川島智生

神戸情報大学院大学客員教授

About the architecture of Nanzan School Corporation
mainly the Reiners Building

KAWASHIMA Tomoo

Archeia: Documents, Information and History
No.19 November, 2024 pp.1-56
Nanzan Archives

- 一、自己紹介
- 二、なぜ学校建築なのか、なぜ来日外国人建築家なのか
- 三、なぜヒンデルからレーモンドか
- 四、南山学園ライネルス館
- 五、ヒンデル設計のさまざまな建物の紹介
 - 五―一、札幌藤高等女学校
 - 五―二、北星女学校
 - 五―三、上智大学
 - 五―四、教会・修道院
 - 五―五、多治見修道院
- 六、アントニン・レーモンドとその作品
- 七、レーモンドの設計した学校建築
 - 七―一、聖心女子学院
 - 七―二、小林聖心女子学院
 - 七―三、南山大学
 - 七―四、上智大学、不二家横浜店
- 八、何がいえるのか

南山学園ライネルス館を中心に南山学園の建築について

二人の建築家 マックス・ヒンデルとアントニン・レーモンドをとおして

川島 智生

一 自己紹介

私は今年（二〇二三年）の三月までは京都華頂大学につとめていましたが、今は神戸情報大学院大学の客員教授ならびに大手前大学史学研究所の客員研究員をしております。私自身は一九九八年に学校建築で博士号を取りました。近代建築史が専門で、本や論文をまとめることにくわえて、ここ二十年ぐらひは文化財の仕事が多いです。埋もれた建築や忘れられていた建築の価値付けをおこない、地域のアイデンティティをよみがえらせる、発掘するというところをこころがけています。従って、無名の建築家たちにもまなざしを注いで、いろいろなこれまでに幾つもの発見をしてきました。

私自身、今から二十五年前に日本で最初の民芸建築である三國荘を大阪で見つけました。それまでは、空襲で焼けてないとされていたものです。今から十八年前にイギリス・ロンドンにある美術工芸の美術館、V & A美術館でその建物の復元に携わりました。それ以外に、例えば京都だと、山科のある陵（みささぎ）にある栗原邸というコンクリートブロックの巨大な建物も、今から二十四年前に私が見つけて最初に論文を書きました。あるいは私のふるさとの瀬の浦で、藤井厚二という建築家が設計した、彼のお兄さんの別荘の建物も最初に見つけて、調査して論文を書きました。今その建物はないのですが、後山山荘という名前だけが残

っています。

顕著な例としてはそういったものがありますが、メインは学校建築史です。二十八年前の阪神・淡路大震災を契機に、近代建築の保存、修復に関する図面や古写真、雑誌、本などをたくさん集めるようになりました。当時八十代、九十代だった建築家の人たちからそういうものを譲り受けて、自宅の書庫は溢れんばかりになっています。さらにステンドグラスやテラコッタ、階段の親柱といった近代建築の部材も壊すときにゆずり受けることもあります。京都の三条に平楽寺書店という鉄筋コンクリートの和風の建物があったのですが、十年前の取り壊しの際に立ち会って、その階段の親柱をタクシーで持ち帰り、自分の大学の研究室に置いていました。それが今、京都府立図書館の展覧会で十二月十七日まで飾られています。そのように珍しいものも集めています。

生まれたのは広島県福山の鞆の浦という町です。そこに母の実家があり、その家は元禄時代の町屋で、『崖の上のポニョ』の中に出てくる家です。一方で、育ったのは大阪の千里ニュータウンの団地です。幼少期に古い建物と新しい団地という全然違うものの間を行き来していたことから、その断絶感から建築の方面に興味がわいたのだらうと、今になって考えています。

これまでの著作としては、主に学校建築についての『近代京都における小学校建築』『近代大阪の小学校建築史』『近代神戸の小学校建築史』という三部作があります。みんな五百、六百ページある大きな本で、いずれも国の科学研究費の出版助成に採択されて出版したものです。今後出す予定の『ミッションスクールの建築史』は、今回のテーマと一部重なっています。『小学校校舎の建築史』が来年に出る予定です。さらに学校以外に普通に都市や建築の歴史も研究しています。去年出したのは『宝塚 温泉リゾート都市の建築史』という六百ページ近くある大きな本です。『灘五郷酒造都市の建築史』という本も出す予定です。

論考としては、幾つかの雑誌に連載をもっており、そちらの方面だけで三百本ほどまとめています。それ以外に論文を建築学会や、大学の紀要に書いていますので、全部で四百本ぐらいになります。よく考えると一カ月に一本近くの論文を上げています。きちんとした論文でないものも多いのですが、そういう仕事を三十数年間ずっと続けています。

二、なぜ学校建築なのか、なぜ来日外国人建築家なのか

本題に入っていきます。なぜ学校建築なのか、なぜ来日外国人の建築家を取り扱うのかということです。明治から昭和戦前期までは、キリスト教の学校建築が日本の中高等教育、高等教育の手本になっていたのです。もちろん帝国大学などは別ですが、ほとんどの学校は、公立の学校、あるいは国の学校であっても、相当キリスト教主義の学校の影響を受けていました。ところが、今までそういう研究は全くなかったです。なぜなかったかというと、調べるのにミッシェンスクールは調査を受け入れてもらうのにハードルが高く、閉鎖的な面があるのです。もちろん帝国大学、あるいは中等教育だと高等学校（当時の旧制中学校）もなかなかエリート意識が強くて、おいそれと資料をオープンにしたり見せたりしません。研究が進まなかった理由はそういう閉鎖的な性格があったのではないかと思います。さて、今日皆さんに見ていただくヒンデルのライネルス館は非常に優れた建築で、南山全体の学園本部あるいは講堂にも影響を与えた建築です。

三、なぜヒンデルからレーモンドか

今日のもう一つのテーマがヒンデルとレーモンドなのですが、なぜヒンデルからレーモンドなのか。ヒンデルは札幌を中心に活躍して、その後、横浜を拠点にするのですが、戦後はドイツから戻ってきていません。戦前まで日本には外国人建築家が結構たくさんいたのですが、戻ってこなかった人も多いのです。レーモンドもいったんアメリカに戻りましたが、戦後また日本に戻ってきて大活躍しました。一方で、プロテストメントの方ではヴォーリズという有名な建築家がいいて、ヴォーリズはアメリカに一度も戻らず、戦争中に日本に帰化したのです。そのように微妙にスタンスが違っていました。戦後にカトリックの建物を手がける人がいなくなつたために、レーモンドに仕事が全部回ってきます。レーモンドはチェコ出身なので、もちろんカトリックの方です。

ヒンデル一家は、祖父がチューリッヒに移住して商人となり、マックスはチューリッヒで建築製図の学校に行つた後、ヨーロッ

バ各地の設計事務所で働き、競技設計、いわゆるコンペティションで何度も入選します。そして一九一六年にチューリッヒで設計事務所を開設し、翌年にはウィーンへ移って銀行などを造ります。いよいよ大正一三年に日本にやってくるわけですが、妹の夫が北大の予科のドイツ語の先生としてこちらに来ていたので、その関係で札幌に來ます。そして帝国大学になって間もない北大の教授たちと交わって、彼らの関係の仕事をしていきます。ヒンデルのヒュッテ（山小屋）は日本で最も美しいヒュッテといわれています。また、札幌にある二つのキリスト教の学校、藤高等女学校と北星女学校を完成させます。北星女学校は一部が残っています。昭和二年に義弟が亡くなって妹が帰国したため、ヒンデルは横浜の本牧に転居します。そこに自邸兼事務所を建設して、今度は東京や宇都宮、名古屋方面で作品を造ります。その後、戦争が激しくなると、ドイツは日本と同盟を結んでいたのですが、やはりドイツに帰ってしまい、最後はバイエルン地方のレーゲンで亡くなっています。

学校建築家としては、藤高等女学校では木造の建築を造っているのですが、その後、ライネルス館、あるいは上智大学は鉄筋に変わっています。

四、南山学園ライネルス館

それでは、今日のメインテーマのライネルス館を見ていきましょう。これは今から九十一年前の昭和七年にできたものですが、非常に良い状態で残っています。グラウンドの方から見ると、少し前面のところが飛び出しています。その部分が階段室です。一番の特徴は、パラペットの部分、あるいは屋上の塔屋の部分にたくさん開口があつて、普通ではないような三角形に切り込まれています。窓も三角形や菱形になっているところがあります。なかなか見ることができないスタイルですが、ヨーロッパの国に似たものが少しありました。それは、当時チェコで流行していたキュビズム建築です。アールデコの建築は一九二五年以降に少しずつはやっていくのですけれども、アールデコになる直前、チェコを中心に、幾何学模様をさらに尖らせたような形がはやっていました。さらにその前にはドイツ表現主義といって、見る人を不安な気持ちにさせるような、重力に逆らうような、下が小さくて

上が太く大きい柱など、不安定さのあるものがはやるわけです。そのドイツ表現主義と幾何学的なアールデコの間に位置するのがキュビズム建築です。私は、やはりこの建物は当時ヨーロッパで流行していたキュビズムの影響を受けた建築だと考えています。今、この建物には補修の跡がありますが、全体は黄土色で、石の粒が中に入っている擬石塗り仕上げという構造になっています。

屋上に上がると向こう側に見える建物は、昭和二六年に清水建設が造った南山大学講堂兼図書館です。面白いことに、ライネルス館の横にあるこの講堂のたたずまいを見してみると、三角形に切り込まれている部分があります。戦後の昭和二十六年にはもうヒンデルは日本にいないのですが、清水建設の設計施工によるこの講堂は、ライネルス館のイメージを实によく伝えています。講堂の中には二階席があります。非常にきつちり造られたものです。

その向かいの少し高い丘の上に、南山の学園全体の本部棟があります。これは、さらにその二年後の昭和二八年に大阪の日建設が造ったものです。この建物も、やはりパラベットの部分に三角形の切り込みがあります。最初にできたライネルス館は昭和七年の建築ですが、その二十一年後の建築ですら同じ形に合わせています。この三つがどこにもない景観を生み出しているのです。

ちなみに、本部棟の上部にはチャペルがあったので、ステンドグラスがはまっています。これはオリジナルのものです。面格子もオリジナルのものがそのまま残っているのです、これも本当に文化財的な値打ちがある建物だと私は考えています。この三つは、みんな非常に形が似ており、独特な景観をつくっています。

このことを整理して以下にまとめてみました。繰り返しのところもありますが、次のようになります。

レーモンドの設計で知られる南山大学の出发点に旧制南山中学校があります。カトリック修道会神言会が設立した学校で、本館校舎は学校が設立された翌月の昭和七（一九三二）年二月に完成します。宣教師のライネルスが敷地探しから、設計者の選定までをも仕切ります。ヒンデルはライネルスとは新潟教会などの設計で信頼関係を築いており、そのことで設計を頼まれます。昭和六（一九三二）年に起工し、工事は大倉組が担当します。鉄筋コンクリート造三階建てで、延坪は五二七坪となります。工費は七一、四八〇円であり、この建築内容を考えれば、ローコストでありながらもこだわった設計といえます。ほかに雨天体操場兼講

堂である至誠堂（一九三四年）、二階建ての西館（校舎）などが後に建設されます。本館校舎は現存し、ライネルス記念館となります。

校舎本館をみます。プランは片廊下式の教室配置を示しますが、中央の階段室の取り扱い方に特徴があり、階段室部分だけが校庭側に張り出します。さらに中二階と中三階の階段踊場には校庭側に突き出し便所が設置されていました。つまり各階に便所を設けるのではなく、その中間の位置に設置されるスキップフロア方式が採用されています。各階に設けるよりも便所の数が少なく済み、建設費の節約となったものと考えられます。

完成予想図には校庭側からの校舎が描かれています。このことから、ファサードは校庭側と判断できます。校庭側の中央部は二十四尺（七・二七m）の長さで突出することで単調さを破り、よりメリハリの付いた外観となります。この幅は三十尺（九・〇九m）あり、中央部の教室の間口の長さと同なります。二階・三階では廊下幅が階段室に向かい合う箇所で、三尺（〇・九一m）広がっており、階段の上り下りに心理的な圧迫感がないように設計されています。この三尺の長さが便所側とは反対の玄関側に突き出します。この操作によって中央部だけが玄関側に突き出ることとなり、その結果道路側からの外観全体のなかで、面としての玄関構えが構成され、風格が生まれています。ヒンデルは平面的な変化によって、外観スタイルを特徴づける手法を用いていたことが読み取れます。このことは藤高等女学校と上智大学でもおこなっていた手法です。

外観の特徴は屋上のパラベットの三角形の切込にあり、その底辺の両端部が直下の桁行方向の柱の位置と重なる構成を示します。そのため三角形アーチが連立するファサードが玄関側にも校庭側にも出現することとなります。おそらくはヒンデルの狙いはここにあつて、日本ではどこにもない外観デザインの校舎誕生につながったと思われます。北星女学校の屋根に設けられた三角形のドーマ・ウィンドオがパラベットに再現されたかの感があります。このような意匠はアールデコというよりもキュビズム建築のデザインに近いものとみることができます。校庭側には菱形の窓が中央部の最頂部に穿たれており、幾何学的な装いをよりシンボリックに強調します。

細部の意匠にふれます。柱型は外壁面から突出し、一階からパラベット下までつながっています。その表面には水平の目地があ

り、一見石を積んだかのようにみえます。スパンドレルには羊の頭を象った装飾が一つずつ設けられます。カトリックの学校らしい意匠です。

庇の扱いを各階で変えることで、ファサードを整えています。三階開口部上には軒が廻り、一階開口部上も蛇腹のように庇が廻り、共に水平に連続します。一方で二階開口部上には庇が窓ごとに設置され、連なっていない。庇は日本の雨の多い気候を考慮した収まりであり、欧米の建築には少ないものです。庇によって立面を分割する手法はルネッサンス建築の三層構成にもとづいたもので、一階はベースメント、二階三階が主階、屋上階は屋根裏と考えていたものと思われます。そのために二階の庇だけを連続させることなく、断片的なものとしたと捉えることができます。

普通教室の大きさは間口が三十尺、奥行きは二十四尺となり、面積は二十坪となります。端部の特別教室は廊下を取り込み、奥行きが三十三尺となり、大きさは広くなり二七・五坪となります。柱のスパンは一教室の間口、すなわち桁行方向は四スパン、柱の間隔は七・五尺（二・二七m）となります。つまり相当に短いピッチで入っているわけです。

この校舎は戦後隣接地に建設された二つの建物の意匠面に影響を与えています。ひとつは昭和二六（一九五二）年に清水建設の設計施工によって建設された南山大学講堂兼図書館です。現在は南山中学校・高等学校の講堂となりますが、正面のパラペット部分に本館校舎と同様の三角形の切込があります。もうひとつは昭和二八（一九五三）年に日建設計が設計した神言会修道院で、現在は南山学園全体の本部棟となります。この建物にもパラペットの部分に三角形切込が設けられます。ここからは戦後の二つの建物も昭和七（一九三二）年に出来た最初の校舎に外観を合わせた意匠になっていたことが判明します。南山学園側ではヒンデルによるこのスタイルを評価していたことがうかがえます。その結果、この一帯に調和のとれた景観が生まれることとなったとみることができます。

五. ヒンデル設計のさまざまな建物の紹介

五―一. 札幌藤高等女学校

札幌藤高等女学校は、ドイツのカトリック系の修道院がつくったものです。ここにはとても有名なキノルド記念館が二十二年前まであったのですが、かなり傷んできたので、解体して一部復元しています。これはヒンデル作の木造建築です。塔屋が玉ねぎ坊主のようになっていて、少し幾何学的なデザインです。これはアントニン・レーモンドが軽井沢に造った聖パウロカトリック教会を想起させます。中央ドイツやチェコの田舎の方にあるスタイルで、フレアドルーフ（屋根勾配を軒近くで緩勾配とする裾広がり屋根）が特徴です。解体した後、塔屋の部分を復元して、その周りは新しく造ったものです。中は教室がたくさんある間取りになっていました。

五―二. 北星女学校

北星女学校は、現在、北海道で最も大きい私立の共学の大学です。最初は女学校としてスタートしましたが、当時、札幌農学校（現・北海道大学）の先生だった新渡戸稲造の進言により、北星女学校という名前になります。その後、北星学園女子中学高等学校に変まりました。その宣教師館の木造の建物で注目すべきは、正方形を四十五度ずらして菱形風にした窓です。これはライネルス館にあったものとよく似ています。そのように四十五度移動させるのが彼はどうも好きだったのではないかと思います。現在はメンテナンスをして、ペンキがきれいに塗られ、創立百周年記念館となっています。

五―三. 上智大学

上智大学もヒンデルが造っています。上智大学は大正二年に専門学校令で高等教育機関（大学）になります。最初はヤン・レツルという原爆ドームを設計したチェコの建築家の作品だったのですが、煉瓦造の塔が関東大震災に耐えきれず倒壊し、ヒンデルが

建て替えをしました。表面にはスクラッチタイルを貼っていますが、鉄筋コンクリートの建物です。その後、レーモンドも上智大学の校舎を造っています。

五―四、教会・修道院

他に、カトリック神田教会や、宇都宮にある有名なカトリック松が峰教会も造っています。これはそのまま残っており、非常に立派な大谷石をたくさん使った鉄筋の建物です。また、北海道時代に函館にトラピスチヌ修道院を造っています。非常にロマンチックなデザインで、誰もがヨーロッパのキリスト教の修道院をイメージすると思います。一部は木造ですが、基本はレンガの建物で、煙突やゲーブルがあります。

五―五、多治見修道院

今から十年ほど前に、多治見にある修道院でいろいろ調べていると、ヒンデルが設計に関わっていたことが分かりました。こちらは木造ですが、トラピスチヌ修道院と少しだけイメージは似ています。多治見修道院は、神言修道会、つまり南山と深く関わるものです。ライネルス神父がこの修道院にいて、ここをベースにミッションスクールの南山中学校ができ、さらに戦後、南山大学につながっていくという意味で、南山学園の原点みたいなものです。ところが、戦後は名古屋の方に組織が全部移ってしまいます。そして台風で傷んでいたのが、取り壊すことになっていました。ところが、地元の多治見の青年会議所が、それはもったいないということでお金を集めて寄付してくれて、今は残って一つの観光資源になっています。

できたときの写真を見てびっくりしました。木造ですが、本当に丁寧にきっちり造っています。まるでヨーロッパにある修道院のような感じですね。結構大きくて、三階建てとなっていますが、実際は四階建てか五階建てぐらいの高さがあります。できた当時の中の様子を、特別に写真を撮らせていただいたのですが、非常に美しくできています。これは実際にはヒンデルの作品のリストからは漏れていたのですが、内部資料で分かりました。

また、新潟にあるカトリックの教会もヒンデルが造ったものです。他にも、名古屋の主税町教会司祭館や金沢にある聖霊病院聖堂もそうです。これらはそのまま残っています。東京の方では聖母病院も造っています。

ヒンデルはカトリック系の宗教施設、特に学校や教会をたくさん造った建築家ですけれども、本人は実はプロテスタントの信者なのです。それを聞いて、そういうこともあるのだと驚きました。ヒンデルの家を最近撮った写真をお見せします。今から九十年以上前の家です。一見新しそうですが、下見板張りで造っていて、ペンキを塗ったり、屋根もやり替えたりして、メンテナンスが良いのです。今は外交官関係の人が住んでいるので立ち入りが厳しくなっています。これは横浜の本牧にあります。

六. アントニン・レーモンドとその作品

今度はアントニン・レーモンドの話に入っていきます。レーモンドは、戦前には六つの学校を設計しています。例えば、とても有名な星薬科大学と東京女子大学は二つとも残っています。そして聖心女子学院（東京）、小林聖心女子学院（宝塚）、ノートルダム清心女子大学（岡山）、聖母女学院（大阪・寝屋川）です。これらに共通している点は、みんな修道院とセットになっている、女子小学校も入っている、そして基本は高等女学校が出発点であったということです。ところが東京女子大学は最初から大学で造られたし、星薬科大学も専門学校令に則って大学の要素がある。

レーモンドは日本の近現代の建築を牽引した人で、例えば鉄筋コンクリートの打ち放しを一番最初に日本で言い、またモダニズムのデザインも最初に手がけました。彼自身はチェコで生まれ、ライトの弟子になって、大正の半ばに日本の帝国ホテルを造るに当たって現場に来るわけです。それが日本との出会いです。その後、レーモンドはライトとあまりうまくいかなかったので、ここをやめて自分で建築事務所を日本で開きます。これがよかったのでしょうか。早い時期にコンクリート打ち放しの邸宅をたくさん造っていて、彼自身の家も麻布にあったし、さらに鉄筋コンクリートで非常に立派なソビエト大使館の建物を造っています。ですので、大変先進的なことをした人といえます。

写真でご覧いただいているのは星薬科大学です。斜路（スロープ）を日本で最も早い時期に造った学校で、デザインとして吹き抜けのところにこのスロープを置くことによって空間をダイナミックに特徴付けています。このスロープは非常に頑丈に造っていて、自動車でも走れるものであると、できたときには言っていたのです。一方で、右側を見ていただくと、これは宝塚にある小林聖心女子学院です。半分だけのアーチの窓になっており、非常に不思議な造形を見せています。

それから、岡山のノートルダム清心女子大学のチャペルと、東京の聖心女子学院です。最初に言っておかないといけないのは、キリスト教系の学校では、校舎以上にチャペルがとても大事だということです。チャペルのないミッションスクールはあり得ません。それはカトリックだけでなくプロテスタントも同じです。ここではどちらも鉄筋コンクリートで造っていて、モダニズム風の建物です。

一方で、寝屋川の香里園にある聖母女学院は一部の棟がコンクリート打ち放しのままで、昭和の初め、今から九十七年前にできたものです。また、岡山のノートルダム清心女子大学の建物の塔屋の部分は、ナンシーというところにあった、百年近く前に前衛的だったオーギュスト・ペレという別の建築家の設計した教会堂の影響をとっても受けています。

日本の建築と外国人建築家との関わりをみると、明治の初めのお雇い建築家の時期と、明治後期から大正期にかけての二回にわたって多くの建築家がやってきます。一回目を代表するのは東京大学の建築学科をつくったコンドルです。二回目はレーモンドやヴォーリズやヤン・レツルなどの建築家です。レーモンドの経歴としては、ブラハ工科大学で建築の勉強をきちんとしていました。レーモンドは昭和十二年まで日本にいました。もうこの時期になるとアメリカと戦争になるのではないかと予感していて、事務所をいったん畳んで帰ります。そして日本がアメリカに負けた後、昭和二十二年にやってきて、昭和四十八年までまた二十五年間いたわけです。

レーモンドの優れている点は、日本の気候風土に合わせた建築を造ったところです。それがヴォーリズや他の建築家にはない点です。他の建築家は、アメリカやヨーロッパのものを直輸入するのですが、レーモンドは日本の風土に合わせて造っているのです。片引戸などもあります。あるいは日本の建築にあるひさしは、ヨーロッパやアメリカの建築にはほとんどないのです。ひさしを設

けると、外観が格好悪くなるからです。でも、レーモンドは長持ちさせるためにきちんと設けています。一方で、日本の民家の影響を受けた丸太組みの木造建築などもレーモンドが得意としたものです。

私が今非常に興味を持ったのは、ジャパニーズモダンというものが一九五〇～一九六〇年代に日本中を席卷します。建築家だけでなく、椅子のデザイナーや倉俣史朗、剣持勇などにもつながっていくのですが、そういうものに一番大きく影響を与えたのがレーモンドだと思います。

丹下健三とらんでレーモンドは日本建築をリードしていきます。ただ、レーモンドのファンの方々にお伝えするのはつらいのですが、でも、やはり日本人としては知っておかないといけないことがあります。レーモンドは、戦中にアメリカに戻ったときに、日本の家屋に一番詳しい男ということで陸軍より戦争協力を強いられて、昭和十七年にユタ州の砂漠で木造二階建ての長屋を数軒設計します。焼夷弾による延焼実験用の建物です。そこでアメリカ軍は、いかに日本の家を燃えやすくするかということにエネルギーを注いで焼夷弾を開発します。それがあったために日本の都市という都市は焼けてしまい、東京などは十万人近く焼死していますし、大阪でも数万人、神戸でも名古屋でも数万人が亡くなるわけです。全部で百万人ぐらいが死んでしまいます。それに間接的に関わっていることを否定することはできません。

そのことは、レーモンド自身が亡くなる前に自伝の中で少し告白しています。「私と妻にとって日本を負かす意味をもつ道具をつくることは容易な課題ではなかった。日本への私の愛情にもかかわらず、この戦争を最も早く終結させる方法は、ドイツと日本を可能な限り早く、しかも効果的に敗北させることだ」という結論に達した」。苦渋の選択だったのです。

七. レーモンドの設計した学校建築

今度は、レーモンドが残した学校建築を見ていきましょう。戦役は南山大学や国際基督教大学、立教高校、上智大学などを造りました。また、三重県立大学（現・三重大学）の図書館は木造ですが、こういうものも造っています。十一の学校の設計に関わっ

ています。

星薬科大学や東京女子大学の建築は、みんな関東大震災より前に既に鉄筋で造っていました。やはり彼は、鉄筋コンクリートに關するともしっかりした考えを持っていたのです。日本のような地震の多いところに耐えられるものということです。

また、レーモンドとヴォーリズは、カトリックとプロテスタントとすみ分けをしていたという点も特徴です。

レーモンド自身は長生きしたので、自伝の中で結構いろいろなことを言っています。先ほどの聖心女子学院のことは、やはりライトの影響を当時はずいぶん受けてしまった、ところが神戸の小林聖心女学院や岡山の清心の場合は、ライトの影響はもうなくなってしまったということを書いています。また、みんな長く持っていて、四十年以上たっても大丈夫だったとも言っています。

七―一・聖心女子学院

聖心女子学院はフランス系のカトリックの修道院です。最初はヤン・レツルが造ったのですが、木造洋館だったので関東大震災でつぶれてしまったわけです。その後、レーモンドが設計します。さらにレーモンドの後には、竹腰健造という住友臨時営繕部にいた人が戦後に造っています。戦前のものとしては小学校の校舎が今まだ残っています。

七―二・小林聖心女子学院

では、小林聖心女子学院をざっと見ていきましょう。まず東京にできて、三年後に神戸の山手通りに第二の聖心女学院ができました。ところが、すぐさま本山村（今の神戸の岡本の辺り）に移ります。さらに今度は宝塚の手前の小林に移ってくるわけです。

ちょうどこの山の方に、今の関西学院大学や神戸女学院大学、神戸女子神学校など、たくさん学校の阪急電車の小林一三の幹線で移ってきます。なぜかという、ここに線路を造ったものの、ただの山と畑と田んぼの中を走っていて全然お客さんがないので、生徒や学生を乗せることで何とか生き残ろうと考えたからです。ただ、これで神戸の町中からみんな阪神間の方に移ってしまうので、神戸の方には大学がなくなってしまう。

レーモンドは、この学校の土地取得の段階から関わっており、配置計画を担いました。また、施工は竹中工務店でした。現在は文化財になっています。

小林聖心女学院の建物は、ロの字の形で真ん中に渡り廊下があるのが特徴です。図で見ると、左が講堂、奥が修道院、手前が主に校舎の部分です。修道院、チャペル、講堂、何もかもが一つの建物にセットになった複合的な校舎であるところが面白いと思います。これは図面が一式残っています。狭い部屋は修道女の個室です。現在は修道院としては使っておらず、生徒たちが使っている部屋ですが、そのままの痕跡が残っています。

小林聖心女学院は、角がアールになっている点も特徴です。階段のデザインも、幾何学的だけど少しこだわっています。私はこちらにもキュビズム的な影響があると考えています。アールの部分にもきちんとひさしが付いているのが特徴です。普通の日本の建築家だと、角をアールにすると格好良いので、ひさしなどは付けずにガラス張りのデザインを施すのですが、レーモンドは日本の厳しい雨のことを考えて、きっちりここにもひさしを付けているわけです。また、今から二十年近く前ですけれども、レーモンドが設計した木造の体育館が残っており、非常に優れた建築だったのですが、結局壊されてしまいました。

レーモンドは、例えばヴォーリズなどの建築家と違って、中心性、左右対称ということにあまりこだわっていません。それが面白い点です。しかもヨーロッパの歴史様式、つまりルネサンスをベースとしたロマネスクやゴシックなど、誰が見ても立派に見える、権威的に見えるようなものを排除して、非常にシンプルで、まだできたばかりのモダンデザインで、こういう大きい学校の建築に取り組んだ希有な建築家です。小林聖心女学園などは非常にシンプルで、ぱっと見たときに、これが百年以上前からある学校の本館であるとはなかなか伝わりにくいのですが、いまだに十分アバンギャルドな形をしています。大きなキャノピー（庇）などでデザインしているわけです。また、生徒昇降口は、ささやかな入り口になっています。でも、雨がからないように少し出ています。こういうのをポルティコと呼んでいますが、いかにもポルティコらしい、しかも幾何学的なシンプルな形に収めている点が特徴だと思います。

建物はロの字の形になっています。面白いのは教室の大きさです。もちろん高等女学校ということもありますが、間口が四間半、

奥行きが四間で、教室の大きさは普通の学校とさほど変わりませんが、しかし廊下の幅が二・七メートルあるのです。普通、学校の片廊下の場合には二・三メートルか二メートルぐらいです。普通より五〇センチメートル大きいだけですごく気持ちが良い空間になっています。また、例えばヴォーリズが造った豊郷小学校などは、みんな開く扉になっているので廊下に人がいると危ないのですが、レーモンドはきちんとその辺のことを考えて、すべて片引戸にしています。壁の厚さも、一階と二階は三〇センチメートルという厚さなのです。当時、大正十五年の段階では、日本はようやく耐震設計が始まりかけたばかりで、壁の厚さはせいぜい一五センチメートルだったのです。大正十二年までは壁もレンガだったので、震災ではつぶれたケースが東京の方がありました。神戸でも、神戸の震災のときに、甲南大学の壁は、フレームはコンクリートでしたが、それ以外はレンガだったのでつぶれました。そういうものとは違って、初めから耐震的に造っているということにもびっくりします。

デザイン的には、今までの歴史様式ではなく、ドイツ表現主義やオランダのデ・スタイル、あるいはキュビズムに触発されたもので、一見風変わりな印象を見せる点が特徴だと私は考えています。いわゆる歴史的な建築、特にルネッサンスの建築がとても大事にした玄関らしさを希薄にしていこうということをうまくやっています。玄関らしさが無いのはモダニズムの建築の特徴なのですが、その非常に早い時期の先駆けだと思っています。

さらには、庇も途切れた庇です。昭和五年以降はインターナショナルスタイルという、モダニズムの中でも水平線を強調するスタイルがとてもあります。そういう場合は庇を連続させるのですが、ここでは連続させずに窓ごとにはめています。

外国人建築家特有のものとしては、部屋の中の窓の上に貼られたタイルがあります。ヴォーリズが設計した神戸女学院でも同じものが見られます。ですから、外国人好みと捉えることもできます。

七二 南山大学

今度は、レーモンドのその後の建築を少し見ていきましょう。東京女子大学、レーモンドホール、南山大学体育館などがあります。抽象表現主義の建物で、昭和三十年前後の建築です。本当に力強い造形です。これを調査したのが十年ぐらい前ですので、今

はもう残っていないかもしれません。他に立教高校もあります

南山大学の方を見ていきましょう。昭和七年に先ほど申し上げたライネルス館ができます。そして昭和二十四年に南山大学ができます。昭和三十七年にキャンパスが移転し、そのキャンパス全体の計画を担ったのがレーモンドです。なぜレーモンドが設計するようになったのかというと、バブリック神父と人間的なつながりがあったからです。初代学長バツヘが考えた案にレーモンドの案が入ってきます。レーモンド自身は、南山大学キャンパス計画で日本の建築界のノーベル賞といわれる日本建築学会賞を取っています。

レーモンドは妻も連れて一緒に土地を見にいきました。一九六一年のことです。丘を歩いて、尾根などを見て、キャンパス全体の計画を作るのですが、そのときに、あまりにも広いキャンパスなので真ん中に一直線に道を付けることを考えます。南北に尾根が入っていることを考えて、そこをメインストリートとして管理棟や食堂、図書館、教室、研究所をたくさん設置しました。軸性を中心に考えたのです。こういうキャンパス計画はまだ日本にはなく、画期的なものでした。要するに自動車が入ってくることを中心に考えたわけです。ピロティなどもあり、モダニズム時代のキャンパス計画です。

レーモンドがキャンパス計画の段階からパーフェクトに造ったのは東京女子大学と南山大学なのですが、リニア（線形）な形で、屏風のように校舎がつながって建つという感じになっています。当時はやっていたコンクリート打ち放し仕上げ、ピロティやシェルの構造の屋根、あるいは一九五〇年代にはやった縦のルーバーなどがたくさん用いられています。また、はやり始めた抽象表現主義の造形も見て取れます。体育館はずいぶん後の昭和四十三年に造られています。レーモンドは八幡製鉄所の体育館も造っていて、それと非常に似た感じですよ。

私はレーモンド論を書くに当たって、南山大学建設の際に、レーモンドの右腕だった建築家の北澤さんに何度かインタビューにきました。東京の渋谷で設計事務所を開いています。建設当時、レーモンドは七十四歳だったのですが、非常に元気そのものだったそうです。八人のスタッフで図面を製作していて、徹夜はざらだったということでした。南山大学の計画の素晴らしところは、小高い山の上にある敷地に八棟の建物を同時に造ったことです。普通は学校建築は、お金が集まったらその都度造るというこ

とで、何年かにわたることが多いのです。これは国立大学でも同じです。ところが、南山大学は一挙に造り上げています。そこが日本では他に類例を見ない、すごいことです。

南山大学の配置図を見ると、真ん中に南北に走っている軸線を中心に、トラックやホールなどさまざまなものが造られていることがよく分かります。

最初の学長は、他にもよくある大学、昔の上智大学のようなイメージでキャンパス構想図を作ったのです。その案は真ん中に塔を置いています。でも、レーモンドはそういうのではダメだということで、この考えは消えました。レーモンドが造ったものの空撮を見ると、真ん中に大きな軸線があつて、ホールや校舎があり、少し扇の形のようになっています。そして道路の下がつながっています。建物の真ん中を道路が貫いているのはびっくりしました。道路と建物のくっついているところが、車の降り場、玄関ホールになつてゐるのです。そういう意味で、うまく考えています。玄関ホールを初めから道路の中に造つてゐるというものです。右側写真は私が十年前に撮ったものですが、屋根がボコボコしているのはシェル（貝殻）構造というもので、昭和三〇年代にとてものはやつたものです。

七・四 上智大学、不二家横浜店

上智大学に戻ります。レーモンドが造った上智大学は日本で最初の高層の学校建設です。今もそのまま残っています。

つい四〜五日前、たまたま横浜で壊す前のレーモンドの建物、不二家横浜店を見ってきました。レーモンドは非常にこだわったデザインを施していることが見てわかります。

八 何がいえるのか

結語に入ります。まず、ミッションスクールはカトリックとプロテスタントに大きく二つに分けられます。カトリックはヤン・

レッツルやレーモンドやヒンデル、プロテスタントはヴォーリス、あるいは立教を造ったガーディナーです。日本の中等教育施設は、戦後は少し違うものの、確実にキリスト教主義の学校校舎を手本にしていました。

さらに詳しく言えば、ヴォーリスとレーモンドはすみ分けをしていたと言えます。レーモンドはいろいろな建築スタイルを用いて造っています。例えば星薬科大学ではライト式とキュビズム、聖心女学院と小林聖心女学院ではキュビズムとデ・スタイル、東京女子大学ではライト式とペレ式とキュビズム、聖母女学院ではスパニッシュとモダンデザイン、岡山ではペレ式とモダンデザイン、三重県立大学ではモダニズム、そして南山大学はモダニズムと抽象表現主義です。このように四十年間で作風を変えているわけです。ただしデザインの基調は一貫してモダンデザインにあったといえます。

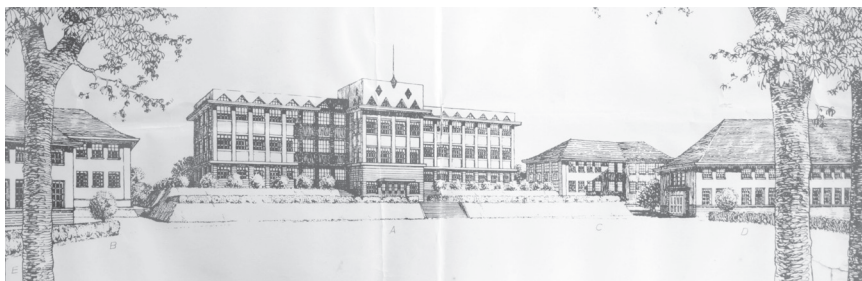
南山学園ライネルス館を中心に南山学園の建築について



旧制南山中学校（川島撮影 2023）



旧制南山中学校・屋上の三角形の切込（川島撮影 2023）



旧制南山中学校・完成予想図（南山アーカイブズ 1932）



旧制南山中学校・校庭側（南山アーカイブズ）

南山学園ライネルス館を中心に南山学園の建築について



旧制南山中学校・雨天体操場（卒業アルバム）



高校講堂（旧南山大学講堂図書館・川島撮影 2023）

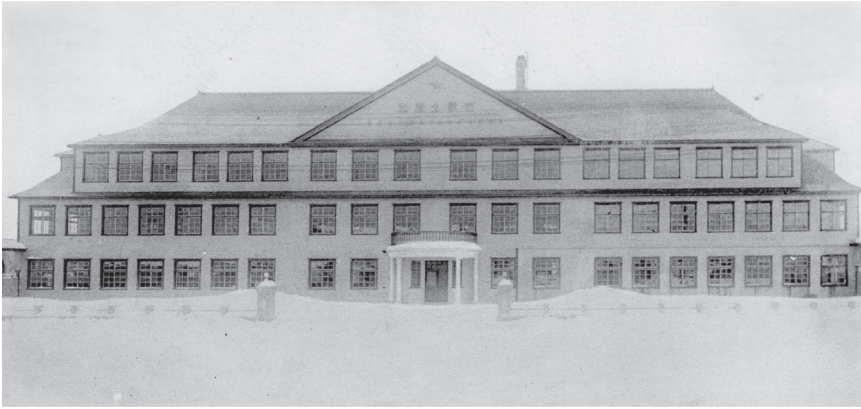


南山学園法人本部（川島撮影 2023）



藤高等女学校（藤学園キノルド資料館提供）

南山学園ライネルス館を中心に南山学園の建築について



北星女学校（絵葉書・北星学園創立百周年記念館提供）



上智大学1号館・ヒンデル（川島撮影 2024）



多治見修道院全景（多治見市提供）



ヒンデルの自邸（横浜・川島撮影 2024）

南山学園ライネルス館を中心に南山学園の建築について



小林聖心女学院（川島撮影 2023）



南山大学・1964年（レーモンド作品集）

南山学園ライネルス館を中心に 南山学園の建築について

二人の学校建築家・マックス・ヒンデルとアントニン・レーモンドを
とおして

神戸情報大学院大学

川島智生

2023.11.22

学校法人南山学園 南山アーカイブズ主催

自己紹介

- ▶ 神戸情報大学院大学客員教授、大手前大学史学研究所客員研究員、前・京都華頂大学現代家政学研究所教授
- ▶ 1998年国立京都工芸繊維大学（博士：学術）。建築史家。一級建築士。インテリアコーディネーター
- ▶ 近代建築史を専門として、文化財指定や登録を担う。
- ▶ 建築をとおして地域のアイデンティティの発掘を行っている。
- ▶ 川島建築研究所を主催し、近代建築の保存と修復
- ▶ 近代建築のアーカイブス 図面・古写真・雑誌・本
- ▶ 川島コレクション 近代建築の部材 ステンンドグラスやテラコッタ、照明器具、階段親柱
- ▶ 広島県鞆の浦生まれ。醸造家の元禄時代の町家、育ったのは千里ニュータウンの団地

これまでの著作

- ▶ 主な著作
- ▶ 『近代京都における小学校建築』 ミネルヴァ書房、『近代大阪の小学校建築史』 大阪大学出版会、『近代神戸の小学校建築史』 関西学院大学出版会の、関西小学校建築3部作
- ▶ 学校建築
- ▶ 予定『ミッションスクールの建築史』『小学校校舎の建築史』
- ▶ 都市と建築に関する著作
- ▶ 『宝塚 温泉リゾート都市の建築史』 関西学院大学出版会
- ▶ 予定『灘五郷 酒蔵と近代建築史』（予定）などを出版。がある。
- ▶ 『奈良の建築家岩崎平太郎の仕事』『近代日本のビール醸造史と産業遺産』『民芸運動と建築』『関西のモダニズム建築』いずれもが淡交社

これまでの論考

4

- ▶ 長期間の連載
- ▶ 『醸界春秋』184回目30年間、清酒・ビール・ワイン・焼酎・泡盛・ラム酒。
- ▶ 醤油・お酢・味噌・塩の建築論
- ▶ 『文教施設』57回20年間、学校建築史
- ▶ 『近畿文化』42回20年間、近畿地方一円の近代建築史
- ▶ 各大学紀要 学校建築史
- ▶ 日本建築学会や大学紀要などの論考も入れると450本を越える数

なぜ学校建築なのか なぜ来日外国人建築家なのか

5

- ▶ 明治から昭和戦前期において、華麗なスタイルの校舎を実現したキリスト教主義の学校建築は日本の中等教育施設の手本となることが多かった。
- ▶ だが、キリスト教の学校建築は日本の教育施設のなかで十分に位置づけがなされたとはいえない。その背景にはミッションスクールの閉鎖性が影響している
- ▶ 本日はレーモンドとヒンデルの二人の建築家に着目し、その意義と魅力を解説する。

なぜヒンデルからレーモンドなのか

6

- ▶ ヒンデルは1940年にドイツに帰国し、戦後は戻ってきていない
- ▶ 戦後はカトリックの建物を手掛ける建築家がいなかったからにはかたならない
- ▶ レーモンドは戦中に一旦アメリカに戻るが、戦後戻ってくる

カトリックの校舎と建築家

7

- ▶ プロテスタント系が多いなかで
- ▶ 鉄筋コンクリート造の中等教育施設は少なく、現存するのは関西では神戸女学院高等部や山手女子、野田高等女学校、森高等女学校、聖心女子、京都は皆無、大阪は聖母女学院、信愛女学校、計7校ですべて女子教育施設である。プール学院や帝塚山学院は名建築であった。
- ▶ 名古屋は東海高校、金城学院、愛知学院、の6校がある。
- ▶ 東京は
- ▶ 横浜は
- ▶ 長崎は
- ▶ キリスト教系が多い

マックス・ヒンデル

8

- ▶ 1887(明治20)年スイスのチューリッヒに生まれ
- ▶ 1916年、設計事務所を開設。本格的活動を開始。
- ▶ 1924年、義弟ハンス・コーラの勧めで北海道へ移住を決意。妻を伴い札幌市に移住。
- ▶ 北海道で教会関係を中心に16余の建築物を設計。北海道における「近代建築の開拓者」と言われる。
- ▶ 1927年コーラの死去により横浜市に移り住む。
- ▶ 1940年第二次世界大戦中のドイツに帰国。
- ▶ 1963(昭和38)年1月末、ドイツ、レーゲンで死去。

ヒンデル一家

9

- ▶ ヒンデル家は15世紀以来、代々農業を営んでいた。
- ▶ 祖父グレゴール・ベンクランツの時代1845年にチューリッヒへ移住し商人となる。
- ▶ アルドルフは教師勤めの後、チューリッヒ市の社会福祉局公務員となった。
- ▶ マックスは1888年チューリッヒの小学校に入学。
- ▶ 1903年、16歳で下級ギムナジウム卒業後チューリッヒで4年間製図訓練を受けた。
- ▶ 1907～1914年、ミュンヘン、ベルリン、パリ、ブリュッセルなどヨーロッパ各地の事務所を巡って修行した。多くの競技設計で成功したと伝わる。
- ▶ 第一次世界大戦中、2年間スイス軍技術科校として兵役。
- ▶ 1916年、チューリッヒで設計事務所を開設した。
- ▶ 1917年、ウィーンへ移って4年間過ごし、銀行などを手がけた。
- ▶ 大正13年(1924) 義弟(妹の夫) ハンス・コーラ(北海道帝大予科のドイツ語教師) の勧めで、北海道に永住する決意で妻アニーを伴いマルセイユを出発し札幌市に移住。
- ▶ 札幌市での滞在期間中は北海道大学教授たちと交わり、彼らの援助を受けながら精力的に設計活動を行なった。
- ▶ 「藤高等女学校(1924)」「札幌女学校女教師館(1926)」「ヘルヴェチア・ヒュッテ(1927)」などの現存作品をはじめ、住宅建築など16余りの建築物を設計。

10

- ▶ 昭和2年（1927）義弟の死やそれに伴う妹の帰国をきっかけに、横浜市本牧に転居する。
- ▶ 自邸兼事務所を建設（この建物は個人住宅で現存しているそう）。
- ▶ 横浜事務所では、札幌から移住したスタッフも多かったそう。
- ▶ 東京・宇都宮・名古屋など各地に作品を残す。
- ▶ 昭和10年（1935）横浜事務所を解散する。本拠を東京に移す。
- ▶ 昭和14年（1939）札幌のヘルヴェチアを訪問する。
- ▶ 昭和15年（1940）第二次世界大戦中のドイツに帰国。
- ▶ 1年間実業学校の教師を務めたそうだが、詳細は不明。
- ▶ 1963年、ドイツ、バイエルン地方レーゲン（Regen）で逝去。
- ▶ 共同墓地に埋葬された。

学校建築家としての顔

11

- ▶ 木造から鉄筋コンクリート造校舎
- ▶ 木造3階建て

南山学園ライネルス館

昭和7(1932)年

パラペットの三角切り込み

12



屋上

13



14



学園全体の本部棟 日建設計 昭和28年

15



16



講堂 清水建設
昭和26年

17



講堂

18



札幌藤高等女学校

19

- ▶ 創設者ヴェンセスラウス・キノルド司教と、その招きによって来日した、3人の修道女、ヨハンナ・サロモン、クサベラ・レーメ、カンジタ・フォン・デル・ハールによって、1925（大正14）年に創立
- ▶ 「殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会」本部はドイツ、リンゲン州デュイネ村）
- ▶ 旧藤高等女学校校舎であった[キノルド記念館]が2001年（平成13年）解体
- ▶ 老朽化と消防法を口実に解体
- ▶ キノルド資料館として校舎が2003年に復元

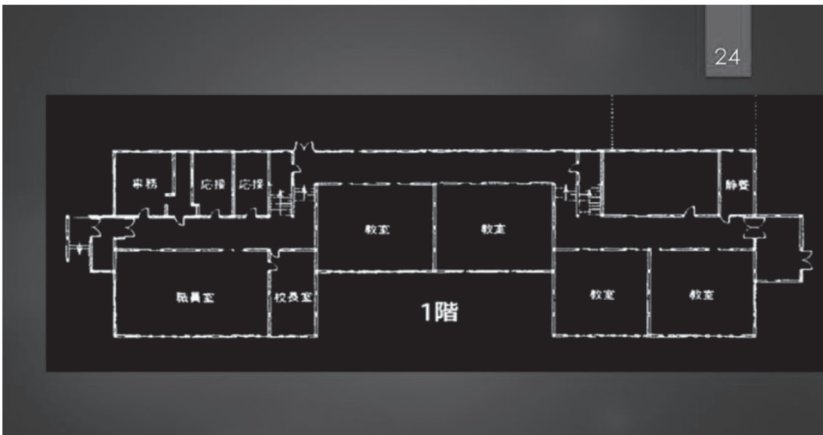


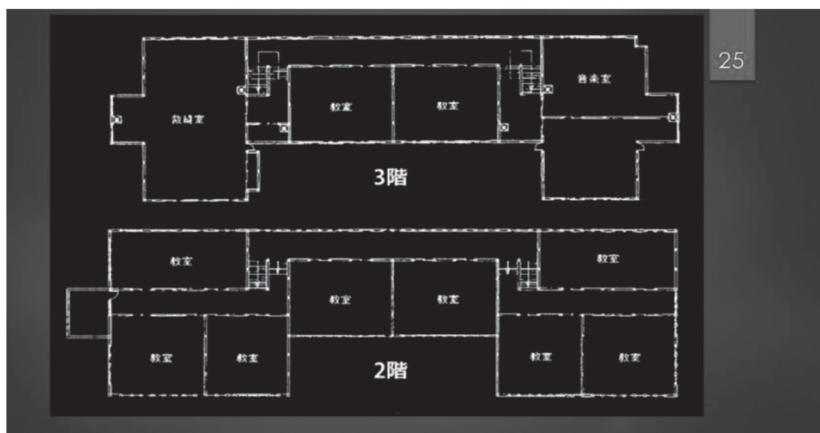
20

建築特徴

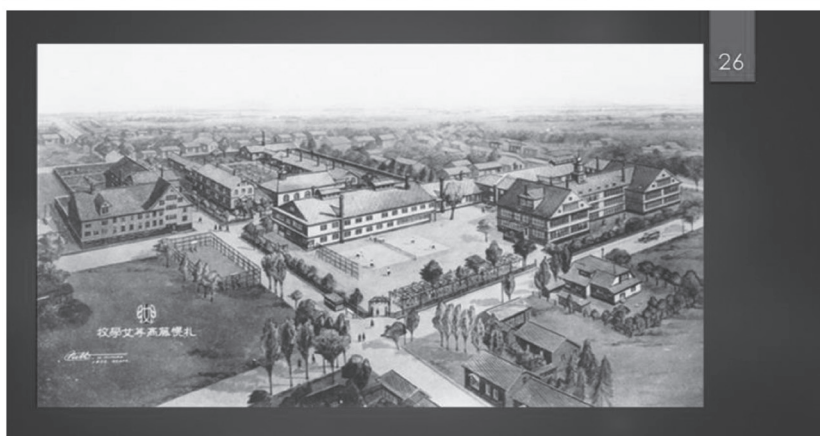
21

- ▶ 木造3階建て
- ▶ 切妻のフレアード・ルーフ（屋根勾配を軒近くで緩勾配とする裾広がりの屋根）





25



26

北星女学校

27

- ▶ 1887年 - 伝道師サラ・クララ・スミスにより、スミス女学校として開校
- ▶ 1894年 - 新渡戸稲造の進言により、「北星女学校」と改称
- ▶ 1947年 - 学制改革により北星学園中等部・高等部となる
- ▶ 1949年 - 北星学園中学校・高等学校に改称
- ▶ 1962年 - 「北星学園女子中学高等学校」と改称
- ▶ 2004年 - 中高6年間一貫教育スタート



28

北星女学校

29



上智大学

上智大学

日本におけるカトリックの最初の大学である上智大学は大正2(1913)年に専門学校令により四谷の現在地に開校する。翌大正3(1914)年にはヤン・レル設計の赤煉瓦の校舎が竣工するが、震災で倒壊した。昭和7(1932)年にはヒンデル設計の校舎が完成し、現1号館として現存する。

レーモンドは戦後の昭和43(1968)年に完成の6号館・7号館を設計している。正確に言えば、竹中工務店と共同で設計し、施工は竹中工務店が担った。6号館は教室棟からなる3階建ての建物で、高層階の7号館へのゲートの役割を果たしたが、現在はない。上智大学の最初の高層ビルの校舎7号館は現存する。内部は中部下式の教員研究室からなり、基階階ではワンフロアに8室が向かい合わせ、計16室からなる。現在はその後に加建された左右に立つ高層校舎に挟まれ目立ちにくいが、竣工時はイグナチオ教会の右面にあり、四谷駅前ランドマークとなっていた。

外観の特徴は正方形の開口部をならべ、屋上階のみパラペットを高く立ち上げ、縦長のスリットを連続させる。全体に垂直性を強調した建物で、わが国大学キャンパスにおける最初の高層ビルといえる。竣工時は開口部廻りのみが白色系の色彩となり、それ以外は灰色系となり、開口部廻りを浮かび上がらせていた。またファサード全体にわたって窓廻りの壁を外側の壁より一段分突き出したデザインがなされていた。が現在はともに白色系に塗られており、段差は保持されるものの、より同一面に近い外観となる。

30



教会

34

トラピスチヌ修道院

35

▶ 函館



36





(二) 神言修道会

多治見修道院はカトリックの神言修道会の管区長ヨゼフ・モル神父によって昭和五年に設立された。ここには神言修道会の日本管区本部が設けられる。

神言修道会とは一八七五年にドイツのアーノルド・ヤンセンによって創設されたカトリック修道会である。当初の目的はキリスト教を宣教するため派遣された外国からの宣教師をここに受容れることにあり、同時に宣教師がここで日本語の習熟をしながら修道生活を送ることであった。

神言修道会の日本での足跡をみると、その布教は明治四〇年に秋田ではじまり、大正一年には地盤とした新潟・金沢だけではなくバリ外国宣教会から愛知・岐阜方面のカトリック布教をゆだねられ、拠点は名古屋となる。大正から昭和戦前期の神言会の布教活動の中心を担ったのはライネルス神父であり、昭和七年に名古屋八事ミッシヨンスカールの旧制南山中学校を設立する。南山大学につながるいく最初の学園である。ライネルスは終戦直後の八月二日に多治見修道院で死去し、その墓地に葬られている。七十一歳であった。

修道院完成後はドイツやカナダ、オーストラリアから修道士がやってくる。修道院が完成した二年後の昭和八（一九三三）年には葡萄が育ち葡萄酒醸造が開始される。ここで造られた葡萄酒はミサ用であり、全国の教会に供給された。

戦後昭和四年に修道院に併設されていた修士修練所は名古屋に設置された神言学院に移り、宣教活動も名古屋に移る。昭和三四年の伊勢湾台風では大きな被害を受ける。本造で規模の大きい建物に風に弱く、塔屋や屋根窓など屋根上の箇所が相当に傷んだものと思われる。しかし十分な修復がなされず、なかば放置された状態となる。その後昭和四三年から昭和五〇年の七年間「十字架のイエス・ペネディクト修道会」のシスターたちの修道生活の場となる。シスターが立ち去った後に、「経営難と老朽化」を理由に取壊しの話が上がり、昭和五十一年には一旦取壊しが決定する。

40

そのことを憂い、地元の多治見青年会議所が中心となって昭和五二年には保存運動が起こる。先見の目があったのだろう。修道院を多治見のシンボルと考え、重要な観光資源と捉えていた青年会議所は修復を市民に呼び掛け、修道院を保存する会が結成される。そして修復費用捻出のための募金活動がはじまる。翌昭和五三年より、青年会議所主催のぶどう祭りと修道院コンサートが十数年間にわたって開催される。ヴァイオリニスト前橋汀子も演奏を聖堂でおこなっている。その甲斐もあり、昭和五四年には総工費一千五百万円かけて屋根瓦ならびに外壁工事がおこなわれた。青年会議所はそのうち五百万円を寄附している。信者は九十万円を負担した。この時にパイオルガンも修理され、カリヨンが設置される。

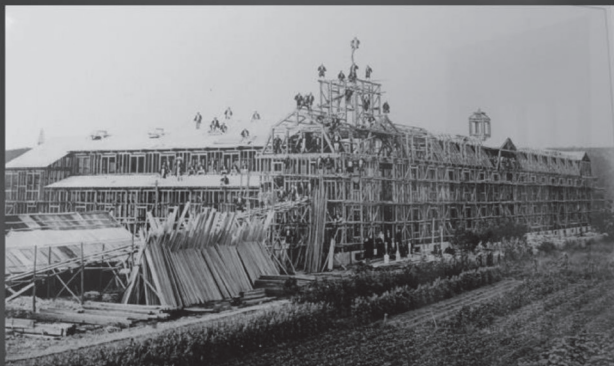
昭和五三年には本町にあった多治見教会が修道院へ戻ってくる。多治見教会は元々修道院に併設設置されていたが、戦後に独立して別の場所に移っていた。昭和六三年には修練院が元々あった修道院へ戻ってくる。平成（一九九〇）年には多治見市の事業として修道院ライトアップがはじまる。

88

41



42





六・建築家ヒンデル

一般的には設計はモートル神父ということであり、建築の専門家が介在することなしに本格的な建物が出現していたことに疑問があったが、修道院で提示された解説文に建築家マックス・ヒンデルが設計に関わっていたことが記されており、木骨モルタルの建物ながらもヨーロッパの歴史様式のもつ格式高い風格に到った謎が氷解した。修道院に聞けば設計図が残っているとのことであったが、現時点では一切公開できないという、共同設計であったことから、どこまでヒンデルが設計に関与したのかは定かではないが、ここで現れた格式はヒンデルがいたからこそ可能になったとみることができ、ただしヒンデルだけの設計でなかったことと、ヒンデルは作品一覧に載せず、これまでのヒンデル研究のなかからこぼれ落ちてしまったのだろう。ではなぜヒンデルが設計者に選ばれたのか。神言会はそれまでもヒンデルに設計を依頼しており、その関連作品は、新潟天主公会堂現存、昭和二年献堂、鉄筋コンクリート造をはじめ、熱田昭和三年、岐阜昭和五年、恵方町昭和六年の各天主公会堂、主税町教会司祭館現存、昭和五年、金沢精養軒病院聖堂現存、昭和六年、旧制南山中学校現存、昭和七年、などが挙げられる。すなわち神言会の宗教施設を一手に設計しており、ある意味ではパートナー的な存在になっていた。すでに修道院をふたつ手がけていたことも依頼につながったのだろう。ひとつは札幌時代の大正一四一九

二五年に聖フランシスコ修道院の新築設計をおこなった。木造三階建ての屋根窓付きの建物を完成させていた。もうひとつは函館のトラピスト修道院の火災で焼失の箇所を修復設計であった。煉瓦造建築であり、昭和（一九二七）年に再建がおこなわれた。

ヒンデルは一八八七年にスイス生まれのドイツ人の建築家で、大正三年三七歳の時に来日し、札幌を拠点に建築活動をおこなった。藤高等女学校をはじめ、住宅やヒュッテなどを手がけていた。昭和二年には横浜本牧に移り、上智大学や聖母病院を東京で完成させる。昭和（一九二七）年に事務所を解散し、昭和（一九二七）年にはドイツに戻り、昭和三年に七六歳で死去した。十六年間日本に滞在したヒンデルはカトリック系宗教施設を主に設計していたが、本日はプロテスタントの信者であったことも付け加えておく。

ヒンデルの家 横濱

46



アントニン・レーモンド

47



大正昭和期・レーモンド建築事務所設計の学校建築について I ー 1921～1938の中等高等教育施設5校ー

48

レーモンドは大正昭和戦前期に6つの学校建築を設計しており、星薬科大学や東京女子大学はよく知られるが、あまり知られない建物に聖心女子学院(東京)・小林聖心女子学院(宝塚)・ノートルダム清心女子大学(清心高等女子学校・岡山)・聖母女子学院(寝屋川)があり、この4校について

レーモンドは次のように記していた。「この四つの修道院と学校はいずれも大計画で、どれも修道院、女子小学校、女学校からなり鉄筋コンクリート造であった。40年間の使用後でもなお申し分のない状態」という。(本文73頁)

写真は川島智生の撮影による



星薬科大学・ホール



星薬科大学・創路

小林聖心女子学院
開口部





慶応義塾大学・ホール



ノートルダム清心女子大学・聖堂

ノートルダム清心女子大学
聖堂正面

聖母女学院・小生用雨天体育場・外観



聖母女学院・聖堂



聖母女学院・小生用雨天体育場・内部

外国人建築家レーモンド

外国人建築家の来日の時期は明治初期の御雇い建築家の時期と、明治後期から大正期にかけての2回に大きく分けられる。前者はコンドルに代表され、後者はここで取り上げるアントニン・レーモンドをはじめ、ウィリアム・メレル・ヴォーリズやヤン・レツルなどが挙げられる。レーモンドはヴォーリズとならび、日本の建築界に深く関わった人物であり、昭和以降大きな影響があった建築家とみることができる。

レーモンドの経歴をみると、明治21(1888)年にチェコのクラドノで生まれる。明治43(1910)年プラハ工科大学を卒業し渡米する。大正5(1916)年にフランク・ロイド・ライトの許で働く。大正8(1919)年12月31日にフランク・ロイド・ライトの誘いで帝国ホテル建設を手伝うために来日する。31歳の時であり、翌大正9(1920)年にはホテル建設現場事務所をつくるが、大正10(1921)年にはライトの許を去り、設計業務を担う米国建築合資会社を東京に設立する。大正12(1923)年に組織

名をレーモンド建築事務所とし、翌昭和12(1937)年12月に日本を離れるまでの18年間日本に在住した。昭和22(1947)年再来日し、以降昭和48(1973)年までの25年間日本におり、昭和51(1976)年にアメリカで88歳で亡くなった。

レーモンドは建築事務所を開設以降は日本で最初期のコンクリート打ち放しなどモダンデザインによる建築の実現の一方で、片引き戸をはじめコンクリート建築にもかかわらず開口上部に庇を付けるなど、従来の日本の建築や気候風土から考え出されたディティールによる建築をつくりあげていた。丸太組の木造建築も日本の民家とは無縁ではない。すなわち好敵手ウィリアム・メレル・ヴォーリズが吹米の建築教科書どおりのトラディショナルな建築を実現させていたのに対して、レーモンド建築は日本の形に触発されたジャパーニーズ・モダンの先駆けをつくりあげていたと捉えることができる。

建築は新しい形やプランを創造することで、日々人々の生活を豊かにしていくという進歩史観がモダンデザイン誕生以来、建築界をリードしており、レーモンドは戦後丹下健三とならび建築界の旗手となり、日本の建築界に大きな影響を与えた。

だがレーモンドを日本におけるモダニズム建築の騎手として手放して称賛するばかりでは片手落ちだろう。レーモンドは日本に帰化したヴォーリズと違い、戦中はアメリカに戻る。そして日本の家屋に詳しいということで、陸軍より戦争協力を強いられ、昭和17(1942)年にユタ州の砂漠で木造二階建

で長屋数十棟の設計を担う。焼夷弾による延焼実験用の「爆撃実験用日本家屋」であった。結果として日本中の都

市は焼失に至る。この事実をレーモンドは亡くなる六年前の昭和45(1970)年に刊行された自伝のなかで発表した。「私と妻にとって日本を失うかす意味をもつ道具をつくることは容易な課題ではなかった。日本への私の愛情にもかかわらず、この戦争を最も早く終結させる方法は、ドイツと日本を可能な限り早く、しかも効果的に敗北させることだ」という結論に達した」とある。レーモンドにとって苦渋の選択であったことが伝わってくる。

52

②レーモンドの設計した 学校建築

レーモンドの代表作は戦前では東京女子大学や聖路加国際病院、戦後では群馬県音楽堂や失われたリーダーズ・ダイジェスト社が思い浮かぶ。作品一覧を俯瞰してみると、戦前までは公共建築は少なく、大使館や外資系企業社屋、住宅が主であったなかで、大規模な建造物としては学校という建築類型が挙げられる。

戦前までには東京女子大学・聖心女子学院・小林聖心女子学院・清心高等女学校・聖母女学院という5つのキリスト教主義学校を手掛け、ほかに星商業学校という1つの私立学校を手がけ

ていた。戦後は南山大学・国際基督教大学・立教高等学校・上智大学の4つのキリスト教主義学校のほかに三重県立大学を手がけていた。以下設計年の一覧を示す。

1. 大正10(1921)年一星製菓商業学校(現星薬科大学)
2. 大正10(1921)年一東京女子大学(図書館は1931年、礼拝堂・講堂は1934年)
3. 大正13(1924)年一聖心女子学院一修道院・教室(聖堂・校舎は1928年)
4. 大正15(1926)年一小林聖心女子学院

53

5. 昭和3(1928)年一清心高等女学校(現ノートルダム清心女子大学)
 6. 昭和6(1931)年一聖母女学院(講堂・体育館は1934年、現香里ヌヴェール学院高等学校)
 7. 昭和26(1951)年一三重県立大学(現三重大学)一図書館(現レーモンドホール)
 8. 昭和34(1959)年一国際基督教大学一図書館
 9. 昭和34(1959)年一立教高等学校
 10. 昭和37(1962)年一南山大学
 11. 昭和43(1968)年一上智大学
- 以上11の学校の設計に関わり、キ

ャンパス計画から設計に関わったものとしては星商業学校・東京女子大学・小林聖心女子学院・岡山清心高等女学校・聖母女学院・国際基督教大学・立教高等学校・南山大学の8校がある。聖心女子学院では修道院・教室、聖堂・校舎の2棟を、三重県立大学と国際基督教大学の2校では図書館だけをレーモンドが手がけることになる。

ヴォーリズがプロテスタントの学校を中心に設計をおこなっていたのに対して、レーモンドはカトリックの学校を手がけた。すなわち棲み分けが出来ていたのだろう。ヴォーリズがスペイン風に対して、レーモンドはモダンデザインと、建築スタイルの上でも対照的であった。

54

レーモンドは自伝のなかで戦前期までにつくられたカトリックの4つの学校について次のように述懐している。

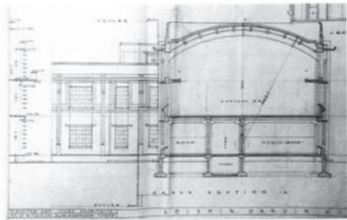
「新しい施主は、東京にある国際的な修道院の東京聖心学院（1924）であった。その新しい学校のデザインには、まだフランク・ロイド・ライトの影響が強く残されている。しかし適切な方位、騒音遮音、大型窓、その他現代の学校計画の特徴をもっていた。だが、神戸郊外の小林にある神戸聖学院（1926）や、岡山の清心女学校（1928）のデザインでは、ライトの影響はぬぐい去られ、東京聖心学院にくらべれば構造はさらに明確になり単純になった。大阪の香里にある聖母修道院と女学院（1931）も、当時私がデザインした大

きな仕事であった。なかでも体育館（1934）は、その自由度と完全な技術の点で、その頃ではきわめて優れた現代建築の一つである。この四つの修道院と学校はいずれも大計画で、どれも修道院、女子小学校、女学校からなり鉄筋コンクリート造であった。40年間の使用後でもなお申し分のない状態」（傍点の箇所は原文のまま）とある。

55



聖心女子学院・外観



聖心女子学院・聖堂の断面図（レーモンド設計事務所蔵）

56

4 聖心女子学院

聖心女子学院の設立は明治41(1908)年フランスを本拠とする聖心会の修道女が語学校を開校したことに端を発する。翌明治42(1909)年にチェコ出身の建築家ヤン・レルンによって、校舎と正門が完成する。明治43(1910)年には高等女学校・小学校・幼稚園が開校することになる。大正5(1916)年には高等専門学校が開校する。現在の聖心女子大学の前身である。昭和22(1947)年には大学設立のために久邇宮邸の敷地を手に入れ、そちらに移る。

聖心女子学院は関東大震災で被災し、修道院、聖堂、理科学堂を取壊さなければならなくなる。ただ中央に塔屋がある本館校舎は震災で破損しながらも致命的な瓦解はなく、震災後に改修工事が施され、戦災で焼失するまでは使用されていた。このことはあまり知られていないが、レルンの本館とレーモンドの校舎が並置されていた時期があったのだ。現在はレルンの作品としては門のみが残る。

57

レーモンドは関東大震災の翌年大正13(1924)年に設計の依頼を受けて、大正14(1925)年に5月に鉄筋コンクリート造校舎を完成させる。聖心女子学院では最初の鉄筋コンクリート造建築であった。建坪133坪、建坪234坪、工費11万7351円であった。スタイルはライト式で、清水組の施工であった。試作として建設されたもので、音楽、科学、作法、教室として使用されたが、現存しない。

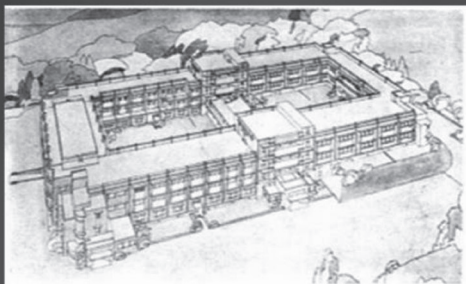
昭和3(1928)年9月に第二期工事として、レーモンドが設計した1階が教室、2階と3階が吹き抜けの聖堂なる棟が竣工する。延坪678坪、工費は33万438円、現在は初等科校舎となる。

外観は全体に幅の狭い見付の柱を表出し、柱の両側に縦長の開口部がつけられる。また一般的な洋風のコンクリートの建物とは異なり、庇が小刻みに開口長さ分だけここでは付く。これは雨と日射しに対処した装置であって、レーモンドがいかに日本の気候の特性を読み込んでいたかがわかる。一方、柱頭飾りにはライトがバーンズドール邸で用いた手法が用いられる。柱頭飾りはコンクリート打ち放ち型抜きでつくられたものであり、かつての師匠であったライトの影響が現れている。玄関廻りの両端の柱型は立体的な処理が

58

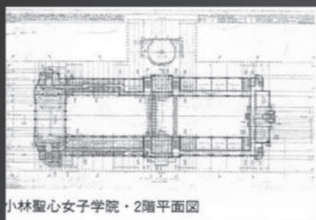
施されたものとなる。

内部は2階3階が吹き抜けとなった聖堂の空間が圧巻である。中央祭壇は半円アーチのヴォールト天井となり、聖堂全体は楕形アーチによるヴォールト天井となり、両側に張り出した片廊下(ギャラリー)が付く。この空間を支えるのが、20尺(約6m)ピッチに入れたアーチ梁である。また階段廻りの手摺子などの意匠が小林聖心女子学院と共通する。



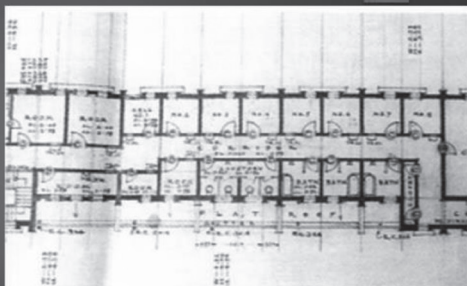
小林聖心女子学院・俯瞰

59



小林聖心女子学院・2階平面図

60



小林聖心女子学院・修道院平面図



小林聖心女子学院・正面玄関



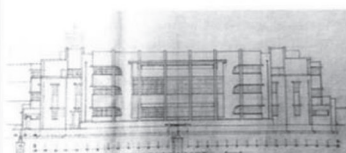
小林聖心女子学院・出入口



小林聖心女子学院・出隅部(北東)



小林聖心女子学院・階段手摺り子



小林聖心女子学院・東棟立面図(レーモンド設計事務所所蔵)



小林聖心女子学院・体育館

小林聖心女子学院

1) 成立経緯

小林聖心女学院はフランスの聖心会によって開設された女子教育の教育機関であって、東京の聖心女学院の姉妹校である。明治41(1908)年に東京に設立をみた三年後の明治44(1911)年に神戸の山手通りに第二の聖心女学院を開設するものの、大阪教区の許可が得られなかったことで、二年後の大正2(1913)年に閉鎖される。10年後の大正12(1923)年に神戸東郊の本山村に開設された修道院を母体に住吉村で語学校が開かれる。

翌年小学校と高等女学校が開校するが、手狭ということで大正14(1925)

年5月に阪急電鉄今津線小林駅の西側の丘上に敷地を求め、翌大正15(1926)年4月より工事が始まり、同年12月に新校舎は完成し移転する。ちなみに阪急電鉄今津線沿線に移転してきた最初の学校がこの聖心女学院であった。神戸市内から離れた東郊のこの地への移転は阪急の小林一三の戦略が背景にあった。大正10(1921)年に開通したが、この沿線は住宅地として熟していなく、存続が危ぶまれていたために学校を誘致することで乗客数の確保が考えられた。小林聖心女学院に続き、関西学院、神戸女子神学校(現聖和大)、神戸女学院が移転してくる。なお、昭和

24(1949)年からは東京の聖心女子大学の分校となり、昭和41(1966)年までは小学校から大学までの女子教育機関となる。

レーモンドは同学院が土地取得の直後から、配置計画を担った。本館の起工は昭和2(1927)年1月で、竣工は昭和2(1927)年8月となる。鉄筋コンクリート造3階建てで、建坪は1,120坪、延坪は2,927坪、工費は90万円で、施工は竹中工務店であった。翌昭和3(1928)年にはレーモンド設計の雨天体操場が完成する。昭和8(1933)年には講堂が、昭和14(1939)年には小学校食堂と弓道場が建設されている。い

ずれも木造建築であった。本館は現存し、国の登録文化財となる。雨天体操場は陸梁に斜材を挟み込んだトラス構造の小屋組を表わしにした空間を有したが、2015年に解体された。

2)プランニング

配置計画からみると、本館は東西に長い平面を示すが、西端は北に上がり、東端は南に下がり、東西の主軸は振れている。小林聖心女子学院のプロパティ(土地)と記された地図には10mピッチの等高線ならびに縦横ともに5間(19m)間隔で標高が記された朱色の折形が記される。ここからは学校が建設される以前の様子が読み取れる。過半は松林で、そのほかに蜜柑畑や耕作地であった。本館が建つ場所は緩やかな

64

傾斜はあるものの、比較的平坦な敷地であったことがわかる。すなわち現在の配置計画は地形を読み込み生じたものであった。

平面形はロの字型の中央に一本線が入った日の字型の平面を有し、教室や事務管理部門のみならず、寄宿舎、そして聖堂(現在は講堂)や修道院をも内蔵する鉄筋コンクリート造の複合施設となる。室配置は1階の北棟・南棟、2階の北棟西側・南棟西側は片廊下式となり、一方2階の北棟東側・南棟東側は、中廊下式で中央部には回廊がめぐり、きわめて完結性の高いプランとなる。また高低差のある敷地の形状により、東側ならびに中央部は三層となるが、西側は二層となる。このことは玄関が1階(グランドフロア)に設けられるもの、生徒・児童昇降口は2階(ファーストフロア)に設置されることにつながった。

平面形はロの字型の中央に一本線が入った日の字型の平面を有し、教室や事務管理部門のみならず、寄宿舎、そして聖堂(現在は講堂)や修道院をも内蔵する鉄筋コンクリート造の複合施設となる。室配置は1階の北棟・南棟、2階の北棟西側・南棟西側は片廊下式となり、一方2階の北棟東側・南棟東側は、中廊下式で中央部には回廊がめぐり、きわめて完結性の高いプランとなる。また高低差のある敷地の形状により、東側ならびに中央部は三層となるが、西側は二層となる。このことは玄関が1階(グランドフロア)に設けられるもの、生徒・児童昇降口は2階(ファーストフロア)に設置されることにつながった。

65

着工直前の図面からは次のような室配置になっていたことがわかる。1階では東棟は生徒食堂や2つの教室、スタディールーム、北棟は玄関や3つの教

室、管理部門、南棟は科学教室やスター食堂、リネン室などからなる。北棟と南棟の西側は1階部分は傾斜した地山の部分に該当する。2階は東棟が聖堂、北棟東側は寄宿舎、南棟東側は修道院で8室の庵室(セル)、西棟は生徒昇降口を中心に左右に料理教室と教室、北棟西側と南棟西側は教室で共に4教室、北棟中央部は年少寄宿舎、南棟中央部は図書室、北棟と南棟を中央部の空中の渡り廊下でつなぐのが10室のピアノ室で屋上テラスが用意されていた。東棟と北棟が接合する場所には寢室用の小部屋となる。3階は東棟が聖堂の上部、北棟東側は寄宿舎、南棟東側は修道院で12室の庵室(セル)となり、2階のプランと共通する。西棟は礼儀室・美術室・教室、北棟西側と南棟西側は教室で共に4教室で、2階

のプランと共通する。北棟中央部は8室の病室、南棟中央部はススター寄宿舎となる。北棟中央部の塔屋4層は運動室が設けられていた。

ここからは教育・生活・宗教の3つに機能分化されていたことがわかる。西側は教育施設で西棟や南棟、北棟ともに教室となり、東側は生活施設で北棟の2階3階が寄宿舎で1階は教育施設、南棟の2階3階が修道院で1階は教育施設と生活施設、東棟は2階が宗教施設で聖堂、1階は教育施設と生活施設からなる。すなわち校舎の位置や階によって用途が分けられていた。

普通教室は23室あり、北棟と南棟の教室ではすべて廊下が北側に配置されており、南面採光が考えられていた。ここでの教室の大きさは間口4間半(8.1m)、奥行4間(7.2m)となる。片廊下の幅員は1.5間(2.7m)となる。教室の廊下の扉は片引戸となり、日本建築の建具の影響と思われる。壁厚さは図面によれば、1階と2階が30cm、3階が27cmと、部屋壁のような取り扱い

66

であったことがわかる。

3) デザイン

この建物はこの時期の学校建築に多くみられた左右対称性を強調した歴史様式の影響を受けたスタイルではなく、モダンデザインによるファサードが実現していた。すなわちゴシックやロマネスクなどではなく、ドイツ表現派をはじめデ・ステイルやキュビズムなどに触発されたもので、その結果一見風変わりな印象をみせる点に特徴がある。その造形意匠が際立つ箇所を挙げれば、玄関出入口・開口廻り・壁面の扱いであり、他に類例のないものになっていた。なお外壁面には3間(7.2m)ピッチで柱型が並び、バラベットの屋根上まで達する。また玄関廻りは塔屋の位置が西側にずらされ、シンメトリーは崩され、非対称の立面となる。

まず玄関出入口からみると、北棟中央部の玄関は車寄せのように躯体より突出する。装飾は一切なく、その代わりに低い位置に設けられたキャノピー(庇)や欄間部分の水平連続窓、出隅が削られ曲面となるなど、幾何学的な形による形態となる。このような出入口の形態は西棟の生徒昇降口にもみられる。この形態をさらに簡素にしたものが、北棟東側の出入口と中庭に面した南棟の出入口にみられる。すなわち歴史様式にみられた玄関らしさが希薄化し、現代の建築につながるスタイルが生まれていた。

67

その上部2階3階には層状に重ねられたコンクリート壁面の形態となる。すなわち外壁面に凹凸をつけることで、装飾や彫刻に頼ることなく外観がデザインされていた。

開口部廻りは窓の上には必ずコンクリートの庇が付くが、後に流行するインターナショナルスタイルのように連続する庇ではなく、1スパン(7.2m)ごとに設けられ、東棟の東側外壁面を除けば、連なっていない。このことはレーモンドが霊南坂の自邸でおこなった手法とも共通する。

東棟の東側外観の開口部は左右両端ともに2階3階ともに出隅部分をアール状に処理しており、1/4円をなす。そのアールに沿って庇が取り付く。庇

は柱型の外側を廻り、矩形の開口部の庇と連続する。この造形を外観全体からみると、中央の聖堂部分に向けて左右からアール状になった庇が落ち込むかのような形をなす。ただ北側1階の1/4円だけは下部まで廻り込み、半円を90度回転させた形状となる。すなわち図面では1/4円が1階2階3階と連なるが、北側1階のように図面のとおりにつくられなかった箇所もあった。現場での設計変更か、後に改修工事によるものなのかは定かではない。

外国人建築家の設計らしく、窓の室内側の台にはタイルが貼られる。ヴォーリスの神戸女学院でも同様な仕上げがみられる。

68

小林聖心女学院

69



大正昭和期・レーモンド建築事務所設計の学校建築についてⅡ ー1921～1968の中等高等教育施設6校ー

建築史家・京都府立大学教授・川島智生

レーモンドは昭和戦後期に5つの学校建築を設計しており、立教高等学校(新座市)や南山大学(名古屋市)はキャンパス計画も担った。前者は近年改築されたが、チャペルと学友会館は現存する。後者は竣工時のままに過半はあり、戦後のレーモンドの代表作といえる。単体の建築では三重

県立大や国際基督教大学の図書館があり、共に現存する。前者はレーモンドホールとして記念館的な使われ方、後者は現役の施設である。上智大学7号館は高層建築の校舎で、四谷駅前にイグネス教会とならび建つ。(本文71頁)



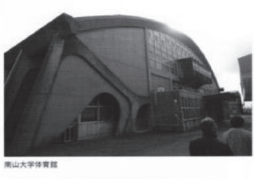
東京女子大学本館(旧図書館)



三重大学レーモンドホール(旧三重県立大学図書館)



立教大学本館(旧学友会館)

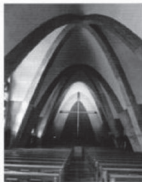


南山大学本館

東京女子大学チャペルの内部



東京女子大学チャペル内部



立教高校・教会内部



立教高校・教会

南山大学

6 南山大学

南山大学とは昭和7(1932)年にカトリック神宮修道会が創設した南山中学校を母胎として、昭和24(1949)年に誕生した大学である。昭和37(1962)年にそれまでの南山と呼ばれた名古屋五軒家町から山里町への移転計画が決まる。一年八ヶ月の歳月を要し8棟

の新校舎からなるキャンパスが整備され、体育館を除き昭和39(1964)年に一斉に完成する。そのキャンパス計画全体を手がけたのがレーモンドであり、個々の校舎の設計までも担うことになる。

レーモンドへの設計依頼の経緯は1960年に南山学園の総務を担当していたスロヴァキア人のバプティック神父と知り合い、バプティックをとおして理事長シュライバーに会ったことが発端になったようだ。レーモンドが設計に関わる以前に初代学長バツヘは中央に聖堂を設けた配置計画を考えていたが、そこにレーモンドの新案がつくられ、シュライバーの全面支持によってレーモンドの案で実施されることになった。レーモンド自身は1965年の建築学会賞受賞の際に、現地視察について次のように述べている。

73

「新しい南山大学の設計をするため、シュライバー神父、私の妻、そして私の3人がその敷地を見に行ったのは1961年(昭和36年)の7月か8月のある大変暑い日でした。私は敷地にある丘や、谷や、狭い道や、低いがよく繁った雑木林など、敷地内を隈なく歩き回りましたが、そのうち特に私の注意を

惹いたのは、尾根に続いている細い道でした。その尾根は敷地の背骨のような形をしていました。そこは四方から微風を受け、東西両方面に素晴らしい眺望を持っていましたので、私はその時その場で直ぐその尾根を敷地計画の基本とすることに決めました。私は建物によって区切られた空間を通じて眺めることのできるこの道路に跨って立つ数々の建物や、部分的にそれらの建物の中を一直線に突き抜けて北と南に眺望の開けた所へ通じるこの道路を目に浮かべることができました。」

74

その結果、「南山大学は、ほぼ南北につづく一本の尾根筋とその両側のゆるやかな起伏をもって広がる斜面とからなる変化に富んだ敷地に計画された。さまざまな機能をもつ校舎群はすべて、正面と裏門を結ぶ尾根筋を通る幹線道路をはさんで配置されており、それらは大学全体の動きと空間に明白な秩序を創りだす」ことにつながる。元レーモンド事務所所員の三沢浩によれば、「校舎の一群を自然環境に適合させ、構造自体を裝飾と考え、単純で、直截で、経済的」な校舎を目指したとある。

全体の計画は正門から北門に続くメインストリートを主軸として、左右に管理本部棟、食堂棟、図書館、研究所棟、教室棟(南・中央・北)、体育館が配される。興味深いことは軸線のメインストリートの上を4棟の建物が跨ぐ形で覆い被さっている点にあり、一階はピロティが用いられる。その間を縫って野球場や競技場、テニスコート、プールなどが設けられた。軸線と個々の建物のこのような関係はこれまでのキャンパス計画にはないもので、自動車が入り込む道路を利用して個々の建物下をピロティの車寄せとした新しい試みといえる。モダニズム時代のキャンパス計画と捉えることができる。

75

このキャンパス計画ではレーモンドは「モニュメンタリティを排除」がテーマのひとつとした。レーモンドの最初のキャンパス計画・東京女子大学では古典的な配置ゆえに視覚的に一望できたが、最後のキャンパス計画・南山大学ではリニア(線形)な形状で、そこに次々と屏風のように校舎が連なって立つために、けっして一望できないもの

になる。すなわちモニュメンタルな要素は打ち消されていた。そのような意味では対照的な内容とみることができ

る。全体に各建物は内外ともにコンクリート打ち放し仕上げを特徴とし、しかも所々に打ち放し仕上げの肌合いを残したままに茶褐色の塗料がかけられる。造形手法としてはピロティや屋根のシェル構造、開口部の縦ルーバーなどが用いられ、1950年代に流行したモダンデザインの影響がみられる。また抽象表現派などの影響による造形も現われていた。

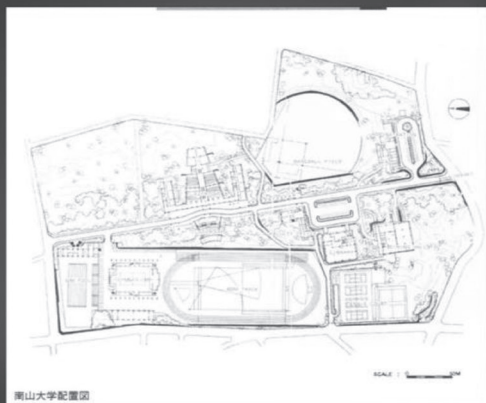
76

体育館のみが昭和43(1968)年に建設されたが、昭和30(1955)年に建設された八幡製鉄所体育館と共通する形態を示す。共にバットレスを両側にみせて踏ん張った形をとり、力の流れを構造体で表現したものとなる。裏面の中央に水平に延びたバルコニーが付くが、八幡製鉄所体育館でも長方形の箱状の出っ張りが設置されていた。

レーモンド事務所に入所し、最初の仕事が南山大学建設のプロジェクトであった建築家北澤與一は南山大学の設計時の様子を次のように述懐する。レーモンドは「元気そのもの」でとても74歳にはみえなかったという。レーモンドの直接指導を受けて8人のスタッフで図面を製作していったが、時間

までに完成させないとカミナリ(激怒)が落ちたという。そして「南山大学の計画のすばらしいところは、小高い山の上にある敷地約5万坪に8棟の建物を同時に造ったところにある」(「南山大学の設計に於ける[建築家アントン・レーモンド]」)とする。本来は何年も要して建設されるのが、ほぼ同時に建設された稀有な計画であった。

77



78



南山大学・パッへのキャンパス構想図

79



南山大学・1964年完成時



南山大学・見下ろし

80

上智大学



上智大学旧6号館、7号館(竣工式パンフレット)

結語



上智大学7号館の現在

81

不二家横浜店

昭和12(1937)年-2023.11.17調査

不二家は1910年横浜元町で出発し、伊勢佐木町店は2号店

ピアホール、洋菓子店、西洋・中華料理店、宴会場、高級喫茶を各階

82



オリジナルのデ・ティール

83



なにが出来るのか

84

- ▶ カトリックとプロテスタントと大きく二分される。
- ▶ カトリックはヤンレツル、レーモンド、ヒンデル
- ▶ プロテスタントはヴォーリス
- ▶ 日本の中等教育施設は確実にキリスト教主義の学校校舎を手本にしていた

結語

- 1) 東京女子大学・国際基督教大学・立教高校の3校を除いてはいずれもがカトリックのキリスト教主義の学校となる。ヴォーリスがプロテスタントの学校を設計していたのと比較すれば、なかば棲み分けが出来ていたことを示している。
- 2) ヤン・レツル設計の本館が既に建設されていた聖心女学院や木造校舎がすでに少し建設されていた星高等商業学校、既にキャンパス計画が出来ていた国際基督教大学、図書館だけの三重県立大学図書館、6号館7号館だけの上智大学以外は、全体のキャンパス計画からスタートした建設事業であった。
- 3) カトリック系の学校には校舎や講堂、寄宿寮、管理棟に比べ、チャペルや修道院などの宗教施設が設けられるが、それらの全体の設計を担っていた。

4) 建築スタイルとしては星薬科大ではライト式とキュビズム、聖心女学院と小林聖心女学院ではキュビズムとデ・スタイル、東京女子大学ではライト式・ペレー式・キュビズム、聖母女学院はスパニッシュとモダンデザイン、清心高等女学校ではペレー式とモダンデザイン、三重県立大学図書館では木造モダニズム、国際基督教大学ではモダンデザイン、立教高校ではモダンデザイン、南山大学はモダンデザインと抽象表現主義、上智大学ではモダンデザイン、と40年間で作風に大きく変化はあった。

5) 建築内容を機能面から考えれば、星薬科大学では一つの建物、小林聖心女学院では日の字型、清心高等女学校で

はL字の変形と、いずれもが一続きの建物の中に内包されている。一方東京女子大学や南山大学では機能ごとに建物が分棟化している。